



果試ニュース

第9号 平成10年11月



ヒヨドリ

この冬、カンキツ園への
飛来が多いと予想されている。
(果実の鳥害防止試験実施中)



新規課題「特産カンキツの商品性向上技術確立試験」について

温州ミカンの栽培面積は、かつて需給調整のために減らしてきた経緯はあるが、最近では主力産地の優良な園地さえ放任されているのが見受けられるようになった。その原因は担い手の高齢化や後継者のいないことによるところが大きい。

この傾向に歯止めをかけるため、そして少ない労力を有効に活かして経営向上を図るためには、園内作業道をつけて、小型運搬車を導入するなど、軽労働省力化を進めることが効果的であり、また後継者の確保にもつながるものと考え、果樹試験場では園内作業を楽にできるような栽培体系について検討を重ね、その実証試験を展開してきた。

しかし一方では、オレンジ等輸入果実の増加や消費多様化の進展、殊に消費者嗜好は高品質で個性的な果実を求めるなど市場動向や消費傾向をみて、これに即応した産地の生産流通体制を整備していく必要がある。

つまり、温州ミカンを基幹品種としながら、外国産果実に対抗して消費を喚起できるような品種を組み合わせるなど、多様に市場対応していかねばならない。

試験場としても、こうした地域特産の品種構成と収穫出荷時期の長期化による作業体系の改善と長期出荷型の高品質生産技術体系の実証試験に、柑橘生産農家の経営向上に役立つように意を込めて取り組むことにした。

場長 向井 武

デコポンの収穫と予措

今年は開花が早く、秋期に雨が多かったことから、昨年以上に酸含量が低く、果皮の薄い果実になると予想される。このため、12月の降雨の後暖かかったり1月に入ってから寒風にあたると果皮障害や腐敗の多発が心配されることから、収穫・貯蔵は次の点に注意する。

1. 年内に収穫すると、貯蔵中の酸含量は低下するが、糖度の上昇が鈍く、減量歩合が高く、へた枯れや果皮の萎びが多くなる。一方、果実を2月頃まで樹上越冬させると着色が優れ、糖度が高くなるが、着花数が減少する。

このため、収穫は酸含量 $1.3\text{g}/100\text{ml}$ 以下を目安とし、1月下旬までには終える。

品質のバラツキを少なくするため、樹冠外周部と内部・下部に区分して採取、貯蔵、出荷するとよい。

2. 収穫後は常温で減量率3～5%程度の風乾予措を行った後、新聞紙でサンドイッチ状に覆い、常温庫内で3月中下旬頃まで貯蔵する。予措温度が高いと、予措及び貯蔵中に果皮障害の発生が多くなるので注意が必要である(表1)。
3. 11～12月に不溶性カルシウム剤を散布すると、果皮軟化症(果皮の表面が軟らかくなり、褐変する症状)やコハン症の発生が少なくなる傾向である(図1)。なお、袋かけ前や収穫前には腐敗防止剤を必ず散布する。

(柑橘栽培班 主任研究員 加美豊)

表1 予措温度が果実障害の発生に及ぼす影響

予措温度	減量歩合 (%)		果皮障害果率 (%)		果皮色 a 値 [*]	
	予措	貯蔵	予措	貯蔵	予措	貯蔵
20℃ (加温)	10.2	5.1	18.8	23.1	100	106
10℃ (常温)	4.2	6.2	10.4	7.7	105	113

注) 予措期間1/16～2/2, 貯蔵期間2/2～3/21
X: 予措及び貯蔵中の a 値の増加率

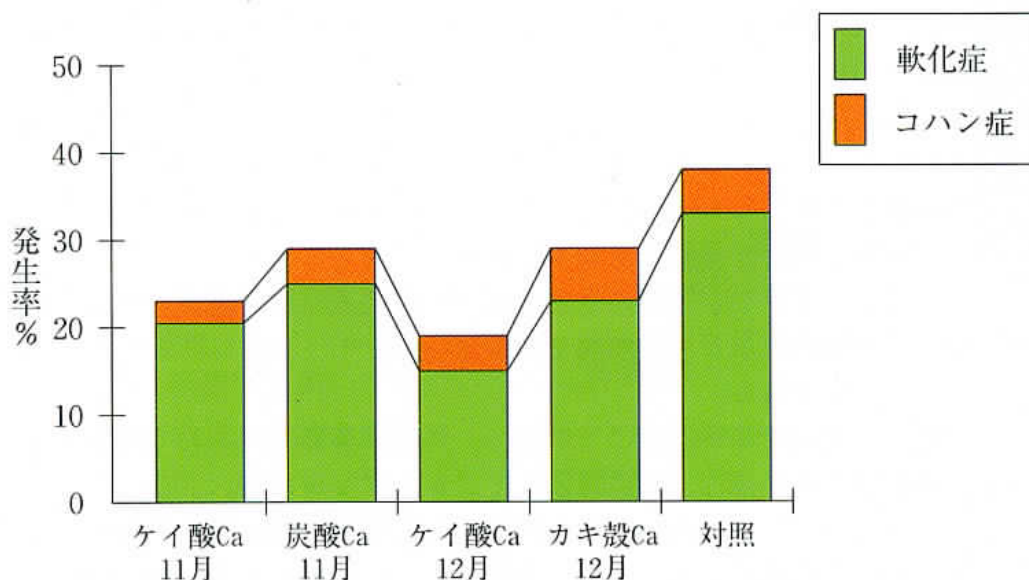


図1 Ca剤散布が果皮障害発生に及ぼす影響

「せとか」の特性について

果樹試験場口之津支場において、(清見×アンコール)×マーコットの交配により育成された。第7回系統適応試験に口之津19号として供試され、平成10年8月21日にタンゴール農林8号として命名登録された。

樹姿はやや開張性で樹勢は中程度である。葉の緑色が深く黒っぽい。結実性は中程度であるが、夏期に乾燥したり着果過多の翌年には極度の不作になることがある。施設栽培では生育が旺盛で、結実も良く豊産性である。果実は150～200gで着果量によってかなり変動する。果形は扁平で安定している。果皮は橙色で厚さが薄く、果面が滑らかで光沢がある。剥皮はやや易で芳香がある。通常無核であるが、周囲に受粉樹があると種子が入る。じょうのうは薄く、肉質はやや弾力があり濃厚な食味である。成熟期は1月下旬～2月頃である。



減酸が比較的早いことから露地栽培も可能であるが、無加温の施設栽培にすると、果実は大果となり、肉質が極めて柔軟多汁となるため、アンコール、マーコットの代替品種としての導入が有望と思われる。

(柑橘育種班 主任研究員 喜多景治)

表1 「せとか」の果実品質 (愛媛果樹試)

分析年月日	一果重 g	果形 指数	果肉 歩合 %	糖度計 示度	クエン 酸含量 g/100ml	甘味比
1996. 2.20	158	126	85.0	12.6	1.14	12.1
1997. 1.21	260	112	82.7	12.2	1.08	11.3
1998. 1.20	199	136	85.1	13.9	1.23	12.2

表2 無加温ハウス栽培の「せとか」の果実品質 (岩城分場)

分析年月日	一果重 g	果肉 歩合 %	糖度計 示度	クエン 酸含量 g/100ml	糖酸比
1998. 2.16 ハウス	199	87	13.4	0.93	14.4
露地	154	84	13.3	1.19	11.2
1998. 3.12 ハウス	215	87	13.8	0.85	16.2
露地	165	85	13.7	0.94	14.6

チャノホコリダニの被害と防除法

近年、宮内伊予柑等を中心に多発して大きな被害がでている。発生面積が拡大傾向にあり、これまで発生をみていない地域でも注意の必要な重要害虫である。

年間の発生経過や被害の実態については不明な点も多いが、宮内伊予柑果実の寄生経過についてみると、落弁直後から寄生し、図1に示すように、6月中旬から7月にかけて密度が高くなる。一般に、8月以降の発生は少ないようであるが、年によって、あるいは薬剤の散布経過等によっては、8月以降にも多発することがある。

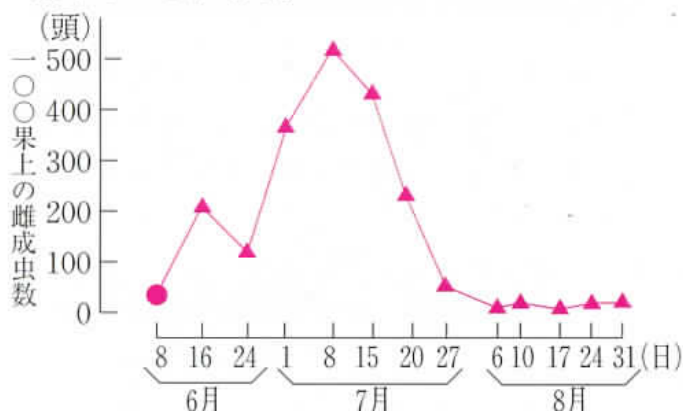


図1 宮内伊予柑の果実上におけるチャノホコリダニの発消長

果実の被害は一般に果梗部を中心に放射状に広がるのが特徴で、灰白色でコルク状の皮膜を形成する。品種によっては、果面全体に広がる(写真1)。落弁直後に多くの寄生を受けた果実は、早期に落果する。温州ミカンにも寄生するが、被害は一般に軽い。また、新梢に寄生して新梢伸長が抑制されることがあり、新葉が奇形になるなどの被害がある(写真2)。

虫体が微細であるため、被害が発生して気付くことが多い。被害果が散見されはじめた頃には多くの果実で寄生密度が高くなっている場合が多く、急いで薬剤を散布しても手遅れになることが多い。

防除は発生初期の薬剤散布が基本であり、常発地帯では落弁直後(5~10日後)にケル



写真1 新梢の被害



写真2 程度別被害果実

セン乳(水和)剤、バイデン乳(水和)剤やサンマイル剤を散布する(図2)。

通常、この1回の防除で十分効果はあるが、果実の被害は8月頃まで発生するので、特に多発生園や散布方法が雑であった場合には被害果の発生に注意し、兆候がみられたら早急に防除する。

(虫害班 主任研究員 荻原洋晶)

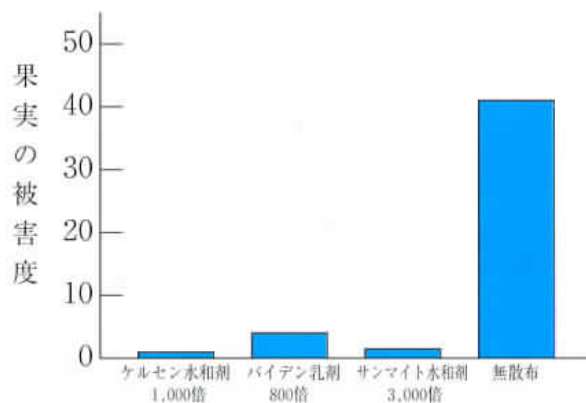


図2 チャノホコリダニに対する各種薬剤の防除効果

編集発行 愛媛県立果樹試験場
〒791-0112
松山市下伊台町1618
TEL 089-977-2100
FAX 089-977-2100